



センター所長の挨拶

白井澄子

今年、児童文化研究センターは発足後二十五周年目を迎えました。センターが堅実に活動を続けられるのも、運営委員、所員、助手さんのお陰と感謝しています。今、センターは人間でいうと二十五歳の若者。分別もありながら、どんどん新しい事にもチャレンジしていきたい年齢です。今後も皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

センターの活動内容のご案内や報告につきまして、ホームページにも紹介がありますので、現在、取り組んでいる活動について簡単に紹介します。

一つは科研費を使った光吉文庫の整備です。光吉文庫は、ご覧になった方々が驚嘆なさるほどの膨大な図書と資料ですが、ただ並べておくだけではその価値は生きてきません。現在は光吉氏が作成した独特の情報カードの整備を進めながら、それらとスクラップや直筆の資料、および所蔵図書とを関連づける作業をしており、これが進むと、子どもを喜ばせる本を見出す光吉氏の感性と作品のつながりが見えてくるのではないかと期待しています。

もう一つは、センター構成員の研究活動へのサポート体制の強化です。今年からプロジェクト未満の小規模の研究会への経済的な支援も行っていくことになりました。また、構成員が研究や勉強などについて気軽に相談ができるセンターとしての役割も強化してまいります。

活動の目玉の一つである講演会は、今年も素敵なゲストをお招きする準備を進めていますので、どうぞお楽しみに。

(所長)



鈴木宏枝氏 博士号取得

本センター研究員である鈴木宏枝氏が、二〇一六年十一月三日に博士号(論文博士)を授与されました。児童文学専攻では、八人目の博士号取得者となります。審査には、審査委員長の鈴木忠先生(本学教授、発達心理学専攻)、指導教員の白井澄子先生(本学教授、児童文学専攻)、石井直人先生(本学教授、児童文学専攻)、井辻朱美先生(本学教授、児童文学専攻)、また外部審査員の神宮輝夫先生(青山学院大学名誉教授、元本学教授)があたりられました。

博士論文要旨 「アフリカン・アメリカン児童文学におけるエンパワメント―可視化、受容、接続―」

本論文は、アフリカン・アメリカン児童文学を「アフリカン・アメリカンの子どもを『内包された読者』とする文学」と定義し、白人・黒人の二項対立を前提とした従来の議論を越えた評価軸の構築を試みたものである。Haidt & Peltus (一九九四)や Bishop (二〇〇七)らの児童文学研究における言説を踏まえた上で、アフリカン・アメリカンのカウンセリングに用いられた「エンパワメント」(Solomon, 一九七六)という心理学用語を、アフリカン・アメリカンの子どもから自己決定力や主体性を引き出す力を表す言葉として援用し、テキストの中でいかに「エンパワメント」が構築されてきたかを検討した。黒人英語やジャズなど独自のアフリカン・アメリカン文化を積極的に評価して「エンパ

ワメント」と結びつけ、児童文学が文化的母胎から滋養された文学であることを論じた点に新規性がある。

「エンパワメント」の内的な特質としては、社会に対し多様なアメリカ人像を提示する「可視化」、アフリカ系のアイデンティティの前向きな「受容」、黒人音楽の自在性やアフリカン・アメリカンのネットワークに根ざす「接続」の三点を挙げ、「はじめに」で、二十世紀初頭までのアメリカ児童文学におけるアフリカン・アメリカンへの偏見と、一九二〇年代以降のアフリカン・アメリカン児童文学研究のこれまでの議論を概観し、用語の確認をおこなった。

「エンパワメントの土台『The Brownies Book』では、ハーレム・ルネッサンス期の児童向け月刊誌『The Brownies Book』(全米黒人地位向上協会、一九二〇―二二)を分析し、編集長の Du Bois (一八六八―一九六三)の個人的知性に依拠しつつ、この雑誌が読者としてのアフリカン・アメリカンの子どもを「可視化」し、アフリカやカリブ海域を経由するルーツの「受容」を促し、挿絵から旧大陸との「接続」が読み取れる点で「エンパワメント」の萌芽となっていると結論づけた。つづくIIⅣでは、二十世紀以降のアフリカン・アメリカン児童文学がこの雑誌で芽生えた三つの特質を深化させ、「エンパワメント」を豊穣化させながらいかに現在に至るかを論じた。

「II可視化の展開」では、多様なアメリカ人像を示そうとする意思から生まれる「エンパワメント」を考えた。公民権運動とともに出版が盛んになった偉人伝は、アメリカ市民の多様性を共同体に向けて主張する。十九世紀に成立したトール・テール(ほら話)のアフリカン・アメリカンの主人公である John Henry 像には、肌の色を越えてアメリカの労働者としての悲哀が表れている。フィクションでは、一九七五年に第一作が出版された全

九作の the Logan Saga (Taylor) の目指す人種混淆に強い主張がある。特に、最終巻の *The Land* (二〇〇一) の主人公 Paul Edward が、白人農園主の父親と元奴隷の母親の間に生まれた混血青年で、「パッシング」(白人へのなりすまし) が可能な白い肌の持ち主である点に、アメリカの開拓者像の多様性が託されていることを評価した。

「III 受容の展開」では、「エンパワメント」の大きな土台になるアフリカ系のルーツの受容とアイデンティティの問題について、民族集団／家族の二面から接近した。まず、*Popo and Fina* (Hughes & Bontemps, 一九三二) や逃亡奴隷の寓話 “All the God’s Chillum Had Wings” の再話に、「アフリカや西インド諸島との素朴なつながりを読み取り、「中間航路」(アフリカ大陸からアメリカ大陸への奴隷航路) の逆走によって痛苦の記憶が書き込まれていると論じた。次に、Virginia Hamilton (一九三四-二〇〇二) の *M. C. Higgins, the Great* (一九七四) における逃亡奴隷の記憶を家族史の「正の受容」、*Sweet Whispers, Brother Rush* (一九八二) における母親の虐待や民族集団固有の病気への理解を「負の受容」とした。後者においては、その受容があつて初めて、主人公はより開かれた世界に踏み出していける。さらに、アフリカン・アメリカン史の受容について、アフリカの神の子どもが人間界にくだつて語り部になるというファンタジー *The Magical Adventures of Pretty Pearl* (Hamilton, 一九八三) の建設性と、六〇年代の人種差別の悲劇を色濃く残すトポスとしての深南部を家族史の中で再受容する *Tonging the Sweep* (Johnson, 一九九三) の意義を述べた。

「IV 連接の展開」では、黒人音楽の成立に関連し、白人との協働やネットワークがあつた点に着目し、アフリカン・アメリカンの経験や文化を介して多様な人々がつながり、それが「エンパワメント」になることを検討した。第一の素材は、逃亡奴隷を補助する秘密組織「地下鉄道」である。「車掌」(奴隷を自由州まで運ぶ役)を務めていた実在の逃亡奴隷 Harriet Tubman (一八二〇

／二一九一三) について、二つの評伝を比較し、アフリカン・アメリカン作家による現代版では、タブマンの偉人性よりも、アフリカン・アメリカン以外の人々も多く巻き込んだ「地下鉄道」というダイナミクスそのものが重視されることを明らかにした。第二の素材は「ストリート」(路上) である。奴隷小屋の「通り」に着想を得た *The Planet of Junior Brown* (Hamilton, 一九七一) では、ストリート・チルドレンが「惑星」を形成して助け合い、ハレム地区を舞台にした *145th Street* (Myers, 二〇〇〇) には、暴力と隣り合わせの日常の中でも隣人とのつながりを大切に、悲劇の連鎖を止めようとする若者の意思がある。いずれも、抑圧された人間に内在する希望への意思と連帯を扱う。第三の素材は、言語である。 *Second Daughter* (Water, 一九九六) の主人公は奴隷であるが、フラニ語(アフリカの部族語)と英語の二つを理解できたゆえに自由と主体性を獲得できる。 *Bronx Masquerade* (Grimes, 二〇〇二) では、ラップや黒人英語を土台にした詩作を通じて現代の中学生たちが相互理解を深めていく。いずれも、アフリカン・アメリカンであることからおのずと生まれた言語経験が新たなネットワークを生み、異なる背景の者同士をつないでいる。

「おわりに」では、以上の「可視化」「受容」「連接」の三つの要素を併流・混淆させながらアフリカン・アメリカン児童文学が展開し、「エンパワメント」のテクストとなってきたことをまとめた。二十一世紀の作品にもこれらの特質が引き継がれ、アフリカン・アメリカン以外の作者がこの文学に参与する可能性にも言及した。

最後に、エンパワメントの文学であるアフリカン・アメリカン児童文学は、アメリカ児童文学の輪の内側に入ろうとするのではなく、輪の外側で多様な文化と結びつき、アメリカ児童文学の領域を広げるフロロニアになりうるのではないかという今後の展望を述べた。

センター主催研究会報告

二〇一六年度、児童文化研究センター主催で第五十六回研究会と第五十七回研究会が行われました。ご参加、ご協力いただきました皆さま、誠にありがとうございました。

以下に、各研究会の概要と、センター構成員による研究会報告を掲載いたします。

第五十六回研究会 土田知則氏講演会

講演者 土田知則氏(千葉大学文学部教授、
本学非常勤講師)
題目 *Le Petit Prince* 星と砂漠の思考
日時 二〇一六年十二月三日(土)
十四時～十六時
会場 白百合女子大学 二〇〇八教室
挨拶 白井澄子氏(本学教授)
司会 八代華子氏(本学助教)

土田知則先生講演会報告

半田 源太

今回の土田知則先生のご講演は、先生に *Le Petit Prince* (『星の王子さま』) のお話をさせていただきたいという、私を含めた学生たちの要望が実現したものでし

た。そのような要望があることを先生にお伝えしたところ、快く引き受けてくださり、今回のご講演が実現しました。

先生は文学理論やマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』の研究をご専門にいらつしやいます。先生がサン＝テグジュペリの *Le Petit Prince* についてどのようなお話をしてくださるのか、一同、とても楽しみにしております。

「学生の頃からこの作品は難しいと思っていた」という前置きから、ご講演が始まりました。しかし、そのお言葉とは裏腹に、*Le Petit Prince* をめぐる先生の話題は多岐にわたり、随所で透徹した読みが展開されました。作者の人生、当時の社会状況、戦争、キリスト教、象徴、言語、他者性……さまざまな面からこの作品について語ってくださり、多くの刺激的な指摘がありました。

先生は本学で「児童文学特殊研究B」のご講義を受け持ってくださいています。先生は、授業中にしばしば「言葉に着目することの大切さ」についてのお話をされます。そのため、多岐にわたった話題の中から、言葉を重視する先生のご姿勢が窺われた話題を一つ取り上げて、それについて書きたいと思えます。

Le Petit Prince にはキツネが登場します。フランス語の慣用句でキツネが登場するものがいくつか例示されました。それらを見ると、キツネが慣習的に「狡賢い」存在として捉えられていることがわかります。

また、フランス文学史の中で、キツネが「狡賢い」存在となっている事例も複数あります。これらの事実を糸口にして、*Le Petit Prince* に登場するキツネが、実は危険な存在なのではないかという読みが提示されました。このような観点からキツネが発する言葉に着目すると、それらがこれまでとは違った様相を呈してきます。特に、キツネが用いる“*appritivoise*”という語が注目されました。この語は、強いて日本語にすれば、「飼い馴らす」や「手懐ける」といったような意味です。キツネは王子様とどのような関係を結ぼうとしている

のか。先生のお話によって、これまでとは違った見方が現れました。

興味深いお話が本当にたくさんあったので、とても書ききれません。「いつまでも先生のお話を聴いていたい！」と思うような、楽しく有意義な時間を過ごすことができました。土田先生をはじめ、今回のご講演の準備をしてくださった方々に感謝いたします。ありがとうございました。

(博士課程三年)

第五十七回研究会 猪熊葉子氏講演会

講演者 猪熊葉子氏 (聖心女子大学名誉教授、元本学教授)
 題目 旅だちの前にひとこと
 日時 二〇一七年三月二十五日(土)
 十四時~十五時半
 会場 白百合女子大学 クララホール
 挨拶 白井澄子氏 (本学教授)
 司会 八代華子氏 (本学助教)

研究とは何か——猪熊葉子氏講演会 「旅だちの前にひとこと」に参加して

若谷苑子

二〇一七年三月二十五日、本学の元教授であり、聖心女子大学名誉教授の猪熊葉子先生の講演会が行われました。「旅だちの前にひとこと」と題する本講演会は、現在の、特に日本における児童文学研究の状況、ファン・フィクションの広まりといった文学を取り巻く

環境の変化、児童文学を研究するうえで有用な参考図書を紹介から、音楽、そして美術までと、多岐にわたる内容でした。そのなかで、特に私の印象に残ったのは、現在の日本の児童文学研究者に向けてのお話でした。

猪熊先生のお話は、現在児童文学を研究する大学院生を取り巻く環境は、先生が学生であった当時と比べ良い環境にあるが、英語圏では優れた児童文学研究が出てきたのに対し、日本にはそれに比類する児童文学研究がないのではないかと、そして、現在の研究者は「どうやったら意味のある研究をできるか」を考える必要があり、先行研究の吟味やそれらを批評すること、そして、動機の探索もまた重要であり必要なことである、というものでした。そのなかでも最も印象に残ったのは、「画一化された考えを変えるには「理想、勇気、知性が必要」であり、研究は他者に理解され意義を認めてもらわなければならないというお言葉でした。研究の新規性や意義は、研究をするうえで常に問われるものだと思います。この二点を提示するのにこそ必要なのは、理想を持ち、研究背景をただ受け入れるだけでなくそれに批判的な目を向けること、また、動機の探索をはじめとする、自分の研究と向き合うことなのだと感じました。

猪熊先生は最後に、本講演会で児童文学から卒業することを告げられました。講演会のなかで先生は、「人生のなかで児童文学に触れたという痕跡を持っていてほしい」、「自分のなかに残っている痕跡を、それが自分にとってどういう意味だったのかを立ち止まって考えてほしい」とおっしゃいました。本講演会は、児童文学を研究する大学院生という身である私にとって、研究とは何か、研究には何が必要かを再認識する機会であったと同時に、先生の「児童文学」に対する思いや考えをお聞きすることができ、児童文学は私にとってどのようなものを考えるきっかけともなりました。

(博士課程三年)



センター構成員活動紹介

みんな排泄している

寺田綾

修士課程を修了して、ちょうど十年がたちました。この間には、結婚し、母親となり……と個人的な生活上の変化もありましたが、白百合で学んだ日々が土台になっていることを実感している感謝の日々です。

専門は日本古代史で、修士論文では平安時代の子どもも観を「排泄」を切り口にして論じました。貴族の姫君のおまるの片づけをした「糞洗童」という子ども（或いは子どもとされた人々）について検討し、「子ども」や「排泄」に対する古代の人々の意識を扱いました。子ども観の変遷を追うことは、我々や次の世代がどのような価値観を持って新しい時代を切り開くべきか、ということを探る上で大きな足掛かりになると考えています。

現在の主な活動は、日本トイレ協会会員として「排泄」をキーワードにした子ども向けイベントの企画や親子向けの排泄講座などです。排泄を考えることは「命」を考えることに直結します。また、「排泄」は単にウンチやおシッコのことを指すのではなく、心のモヤモヤ解消も重要な排泄であると位置づけ、心身両面の排泄にどう向き合うか……を考えます。とかく我々は、都合の悪いものを見ないようにしてやり過ぎす傾向にあります。生々しいもの、汚いもの、恥ずかしいものを認めたくないという本音があります。まさに「くさいものにフタ」です。極めて具体的な例で恐縮ですが、トイレで用を足すという行動一つ取っても、たった今自分の体から出た排泄物（体からのお便り）を観察する間もなくセンサーが反応して水が流れていきます。日本中の最新型のきれいなトイレで行われる、生々しくない排泄は私たちの生活からとても大事なな

のをも流してしまっているような気がしてなりません。少し乱暴な言い方になるかもしれませんが、生々しさを直視しないことが、現代の家族関係や親子関係の深刻な問題にも繋がっているのではないかと、今、強く感じています。表面的にはうまくいっている家庭から悲劇が噴出することがあるのを、度重なる不幸なニュースでご承知のことでしょう。家族や親子も人間同士の付き合いです。それは生々しく、きれいなものばかりではありません。しかし、都合の悪いもの（くさいもの）だからこそよく眺め、その臭いを嗅ぎ、徹底的に向き合う必要があります。個人で背負いきれない場合は他人の助けを借りても、共に生きていることを投げ出さないのだという覚悟が必要です。

本当のことから目を背けない、ということは「現代の子ども観」を考える上でとても重要です。我々は「子どもらしさ」という言葉に無意識のうちに縛られ、踊らされ、苦しむことがあります。作られた価値観や理想形を押し付けず、他人として尊重しながら目の前の子どもに向き合うことが果たしてどれだけでできているのでしょうか？

「子どもとは何か？」という問いを持ちながら子どもに向き合うのはなかなか骨の折れることですが、その問いを常に掲げ続けることこそ「子どもに関わる研究者をする者」の責務ではないでしょうか。児童文化研究センターに所属する者として今後も冷静にかつ情熱を持って「子ども」を見つめていく所存です。

（研究員）



留学生 日本滞在記

人生の二期一会

孔阳新照

二ハオ！ こんにちは！
中国出身のコウヨウシンチョウです。小さい頃からずっと「あなたの名前は四文字だから、日本人なのか」と聞かれていました。しかし、ほんとうに日本に来るとは思いませんでした。

日本とのご縁に結び付いたきっかけは、やはり日本の児童文学でした。小学四年生の頃、初めて日本の児童文学作品を読んで、まるで『不思議の国のアリス』のうさぎ穴に飛び込んだように、夢中になったのでした。安房直子のキツネや、あまんきみこの運転手・松井さんや、末吉暁子の黒ばらさんや、木暮正夫のおばけねこなど……毎日の夢に出演していました。

特に、安房直子の作品の独特なファンタジー世界とその叙しさや、美しさが深く印象に残っています。また、宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』は私の心を揺り動かして、「蠨の火」というエピソードを思い出した際に、感動がよみがえってきます。ですから、その時から十年後に白百合女子大学大学院に入学して、思いがけず宮澤賢治先生と出会うことができたことを、本当に不思議で、幸せだと思っています。

中学生の頃に「いつか日本語を学んで、原書の児童文学を読んでみたいな。こんなに素晴らしい作品が誕生した国にいつかみたいな」という願いを抱きました。そしていろいろなご縁があって、二年前にようやく日本に来ました。

日本に来たばかりの頃、日本語は不得意でした。日本人に話し掛けられても、いつも「大丈夫です」と返事して、よく笑われました。言語や専門知識などの大きな挑

戦に向かって、不安と悩みの絶えない毎日を通して見ました。一番スランプの時期に、安房直子の同窓生の蓮見けいさんと知り合って、彼女から安房直子が童話創作に一生を捧げたことを知りました。幼い頃からずっと感銘を与え続けてくれたこの作家へ近づけば近づくほど、児童文学の道に辿り着くのを励ましてくれると感じました。努力は報われて、夢への入り口——白百合女子大学大学院の児童文学専攻に入りました。

自分の人生がこんな風に展開していくとは、幼い頃は想像もつきませんでした。白百合女子大学大学院で勉強する間に、日本の茶道の「一期一会」のように、ここで出会っているこの時間は、二度と巡っては来ないたった一度きりのものなので、一瞬一瞬を大切に、今出来る最高の思い出を作りたいと思っています。

(修士課程一年)

◆ 科研費作業中間報告

昨年度交付が決定した平成二十八年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）をもとに、光吉夏弥所蔵資料の公開に向けて、整備を進めています。

今回は、この作業を実際に行っていたらだいたいという大学院生に体験談をお寄せいただきました。

◆ 小林夏美

光吉夏弥の遺した書誌情報カードのデータ化作業を行った。英語圏の児童文学作品・作家に関する情報を中心となっていたが、フランス語やドイツ語をはじめとした他の言語による情報も含まれていた。また日本のものに関しては、研究書や文学作品以外の、遊び等についての児童書の情報も収集されており、視野の幅広さがかげえられた。

情報はタイプされた内容や新聞・雑誌記事の切貼りがほとんどだったが、余白に付加情報が書き添えられているものも多く、他のカードとの関連を記している場合も少なくなかった。簡潔かつ丁寧な記述から、膨大な枚数にわたってカード化されている情報が、個別のものとしてだけでなく、光吉の中で有機的につながっていたであろうことが感じられた。

(博士課程三年)

◆ 深民麻衣佳

作業が始まったころ、カードの枚数は約三万五千枚という予想でした。途方もない数と思いましたが、作業が進むと、なんと、予想を一万枚ほど上回る枚数であることがわかりました。

カードの情報は多岐にわたりますが、基本的に著者名を見出し語にして作られています。馴染みのある名前はもちろん、見たことのない名前も沢山ありました。新聞の切り抜きが貼られたカードもあり、幼いころ読んだ本の紹介記事を見つけると、宝箱を開けたような気持ちになりました。

これらのカードに触れることで、児童文学という分野の広さを改めて認識しました。自分の研究テーマを追求することで手一杯になりがちですが、視野を広くもつよう心がけ続けなければならない、と思います。

(博士課程三年)

◆ 山越夢子

児童文化研究センターが所蔵する光吉文庫のカード資料のデータ化にあたり、私は、光吉夏弥先生が作られたカードの内容をデータ化する作業を行っています。

膨大な量のカードには、日本や英米の児童文学に関するデータのみならず、スウェーデンやロシア、中国など、様々な国の児童文学に関するデータが豊富に収集されています。また、児童文学・絵本・研究資料などに関するデータの他に、新聞の切り抜きや他のカー

ドとの関連なども整理されており、光吉先生のお仕事の丁寧さと細かさ、データ収集の幅広さ、作業量の多さに日々驚かされています。

光吉文庫を利用される方が効率良くデータにアクセスできるよう、これからも丁寧に作業に取り組みたいと思います。

(博士課程二年)

◆ プロジェクト活動報告

児童文化研究センターは、センター構成員による研究の促進を目指して、プロジェクト制度を設けています。

二〇一七年度は、次の五つのプロジェクトが活動しています。

小波日記研究会（小波日記を読む）

（研究代表 猪狩友一）

巖谷小波日記（センター所蔵資料）の翻刻・研究を継続しています。二〇一六年度は、明治三十七年の日記を読み進め、そのうち七月〜九月の翻刻と注釈を「児童文化研究センター論文集」に発表しました。六月の研究会には、川上音二郎とその妻貞奴を研究されている他大学の院生の方も、特別にご参加くださいました。小波日記には、川上はじめ演劇関係の記述も散見され、自身もお伽芝居に参画するなど、興味深い内容が見られます。二〇一七年度も、おおよそ一回のペースで研究会を催し、引き続き明治三十八年の日記を読んで参りたいと思います。

近現代児童詩歌研究

(研究代表 宮澤賢治)

本プロジェクトの活動成果をまとめた『児童詩歌』は、十三号となりました。第一号から続く「賢治と童謡」も十三回目の連載となり、今回は学校劇の作品にオベラの影響があると言及しています。「有本芳水の少年詩」は十回目の連載で、投稿詩から『芳水詩集』に至る作品の変化について論じています。「中川ひろたかの「あそびうた」研究」(二)は、楽譜集『乳児のため』の空とぶあそび歌』を検討しています。

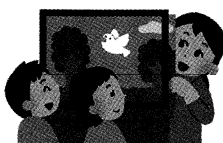
昨年度よりメンバーの加入がありましたので、今年度は近現代の児童詩歌へのアプローチが多彩になるのではないかと期待しております。

紙芝居研究

(研究代表 浅岡靖央)

昨年度は、研究会をほぼ毎月一回開催し、紙芝居の歴史と現在を通して様々な作品に触れていくことで、紙芝居に関する基本的な理解を深めつつ、参加者それぞれの関心のありかを探っていきました。また、紙芝居が生かされている現場として、地域のチャイルドサロンにも足を運んで、ごく幼い子ども達が食い入るように紙芝居に向かっている姿に驚かされたりもしました。

二年目を迎えた今年度は、引き続き作品に触れたり現場に赴いたりしながら、参加者全員の関心に基づいた共同研究を進めようと考えています。年度末にはその成果を冊子として刊行する予定です。



ネオ・ファンタジー研究会

(研究代表 井辻朱美)

ネオ・ファンタジーに関連する論文(日本語・英語)を精読し、議論することで、ネオ・ファンタジー及び関連する分野への理解を深め、研究として新たなアプローチの方法を模索していくことを目的とします。また、プロジェクトの活動を通して、メンバー各自の研究の一助となることも目指します。

今年度の活動としては、ネオ・ファンタジーに関する論文の精読によって概略を捉えた後、ネオ・ファンタジーの起点ともされる「ハリー・ポッター」シリーズに関する研究書の中の論文を分担して精読していく予定です。ネオ・ファンタジーに関わる作品・作家や関連する分野に関心のある方の参加をお待ちしております。

あまん・立原・安房作品研究

(研究代表 石井直人)

本プロジェクトは、あまんきみこ・立原えりか・安房直子の作品を対象とし、各作品の特徴を考察するために今年度から発足しました。活動としては、先行研究の収集と検討の後に、各作家の作品論を執筆する予定です。

あまん・立原・安房作品の特徴を再考することによって、新たな作品研究の一つとなるとともに、今までの研究方法では評価し難かった作品の一面を、別の視点で評価する方法を模索することを目的としています。また、この三人の作家を総合的に論じた後、「童話」というキーワードについても再考したいと考えています。このプロジェクトがあまん・立原・安房作品研究の進展の一助となることを目指して努力してゆきたいと思っております。

センターからのお知らせ

東洋先生ご逝去

一九八五年度より一九九六年度まで本学文学部児童文学科(当時)の学科長を務められ、一九九二年度より一九九七年度まで児童文化研究センター所員であられた東洋先生が、二〇一六年十二月十三日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

西村醇子先生客員研究員に

今年度、西村醇子先生を児童文化研究センター客員研究員にお迎えいたしました。西村先生は、昨年度まで本学人間総合学部児童文化学科で非常勤講師として教鞭を執られていました。

センター報の電子的公開開始

『白百合女子大学児童文化研究センター報』の電子的公開を、二〇一八年一月より開始することになりました。

電子的公開の対象は、第四十四号(本号)からです。冊子体の刊行後半年が経過したものを電子的に公開していきます。現在、児童文化研究センターのホームページ上で閲覧していただけるよう整備を進めています。



センター構成員一覧

(二〇一七年七月現在・敬称略)

所長

白井澄子

運営委員

浅岡靖央 石井直人 井辻朱美
白井澄子 間宮史子
森下みさ子 やたみほ

所員

浅岡靖央 猪狩友一 石井直人
井辻朱美 白井澄子 間宮史子
森下みさ子 やたみほ

客員所員

猪熊葉子 小澤俊夫 神宮輝夫
松井千恵 宮澤賢治

助手

八代華子 酒井志麻
金子真奈美 高原佳江

客員研究員

生駒幸子 西村醇子

委嘱研究員

木村八重子 竹田修

研究員

石元みさと 伊藤かおり 伊藤敬佑
遠藤知恵子 尾崎るみ
神戸洋子 岸野あき恵
倉田恵理子 佐々木江利子 佐々木裕里子
沢崎友美 志村裕子 鈴木あゆみ
鈴木宏枝 谷村知子
寺田綾 中川理恵子 永島憲江
浜名那奈 宮崎麻子 山本麻里耶
林佳慧 和田啓子

準研究員

安達愛 黒川夏帆 南口菜々

院生 (博士課程)

アハマドヒスブラー
グラントウ、カトゥリーナ
小杉りら 小林夏美 鈴木律子
半田涼太 深民麻衣佳 三池洋江
山越夢子 劉冠玟 若谷苑子

院生 (修士課程)

大西香里 岡部愛 五井結基
孔阳新照 下田有希 祖怡明
中島菜穂 西野美菜 沼本知自
政氏裕美 三井彩愛

編集後記

二〇一七年四月、児童文化研究センターは設立二十五周年を迎えました。また、毎年発行しております『百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』は、二〇一七年三月で二十号を数えました。試行錯誤を重ねながらも、これまで順調な歩みが続けてこられたのは、皆さまのご支援のおかげです。
これからも、児童文学・文化の研究環境の充実に努めてまいります。今後とも、変わらぬご指導とご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。
(八代・酒井・金子・高原)

児童文化研究センター
夏期開室予定日

～7月31日(月)	9:00～17:00 (平常開室)
8月1日(火)～9月21日(木)	閉室
9月22日(金)～	9:00～17:00 (平常開室)



『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集21』原稿募集

児童文化研究センターでは、児童文学・文化研究の活性化を目的として、年に一度、研究論文集(査読制)を発行しています。二〇一七年三月には、第二十号を刊行し、投稿原稿の中から、五編の論文と一編の研究ノートを掲載しました。刊行された研究論文集は、児童文学・文化関連の研究者及び研究機関等に寄贈しています。研究成果を発表する場として研究論文集をぜひ活用ください。

つきましては、以下の要領で『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集21』(二〇一八年三月発行予定)の原稿を募集いたします。ご投稿をお待ちしております。

締切

二〇一七年九月二十五日(月)午前中必着

提出物

- ① 表紙(論文題目、氏名、構成員の身分、郵便番号、住所、メールアドレス、文字数、投稿区分(研究論文/研究ノート)、申告事項(あれば)を記載)
 - ② 本文(参考文献、注、図、表等を含む)
 - ③ 論文要旨(300字以内、論文題目を併記)
 - ④ 欧文要旨(採用決定後、100 words以内で提出。欧文題目を併記)
- 以上、①③について、プリントアウト各一部及びデータ提出すること。

提出先

〒一八二一八五二五
東京都調布市緑ヶ丘一―二五
白百合女子大学 児童文化研究センター 宛

データの送付先

<akahara@shirayuri.ac.jp>
研究論文集担当 高原佳江

審査規定(センター規定より抜粋)

- * 研究論文集審査のための編集委員会を設置する。
- * 編集委員は所長が依頼した、本学専任教員またはそれに相当する者から構成される。
- * 投稿原稿は編集委員会の審査を経て、許可されたものが掲載される。

投稿規定

- 一、執筆者は原則として児童文化研究センター構成員とする。
- 二、児童文学・文化に関する研究論文、研究ノートを対象とする。
- 【研究論文】先行研究に加えるべきオリジナリテイのある研究成果が明確に述べられているもの。
- 【研究ノート】資料の紹介・精査、論点・仮説の予示、既存の仮説の検証作業、研究の中間報告等、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているもの。
- 三、投稿に際して、審査を希望する投稿区分を明記する。ただし、審査結果によって、区分は変更されることがある。
- 四、表紙、本文、論文要旨、欧文要旨はマイクロソフト社のワードで提出する。

審査結果発表

二〇一七年十月九日(月)〈予定〉

注意事項

- a. 完成原稿を投稿する。
- b. 原則として、数字は、横書きの場合は半角英数字、縦書きの場合は漢数字を用いる。いずれの場合も半角カタカナを使用しない。
- c. 特殊記号、飾り文字、不必要なスペース等をなるべく使用しない。
- d. 図版、写真等を掲載する場合、執筆者の責任において、あらかじめ著作権者から許諾を受けるものとする。画像は鮮明なものを使用する。高度な印刷技術を必要とする場合は、実費自己負担となることもある。
- e. 学会等で口頭発表したものを投稿する場合は、その旨を本文末に記載する。
- f. やむなく投稿規定を逸脱する場合は、その旨を表紙に記載して申告する。その内容は編集委員会に審議される。
- h. 採用した原稿についての著者校正は初校、再校のみとする。著者校正での誤字脱字以外の加筆修正は原則として認めない。
- i. 不明な点については、研究論文集担当者に問い合わせの上確認する。